インタビュー対談

写真家・医療ジャーナリスト　ITO SHUNYA

伊藤 隼也

文：登那木 順　撮影：細井 研志　デザイン：医療情報研究所

現場の声を吸い上げ社会にフィード・バックしていくことが僕の使命だと思っています。

各地の病院をめぐる「伊藤隼也が行く」の連載スタートに先駆け、伊藤さんと石田幹事長が看護の現状について熱く語ります。

私にしかできない看護というものがあってもいいのではないでしょうか。

石田　伊藤さんは写真家としてもご活躍なさっておられますが、医療ジャーナリストになられたきっかけを教えてください。

伊藤　写真家というと報道写真をイメージされる方も多いと思いますが、僕の場合はむしろエンターテイメントなジャンルで多くの写真を撮っていたんですね。女優さんの写真集やポスターの撮影ですとか、どちらかといえば世の中の青少年を楽しませる写真（笑）。なぜ医療の世界に入ったかというと、父親を医療事故で亡くしたことがきっかけでした。僕にとっても家族にとっても、正に青天の霹靂のような出来事でした。家族の死というものは、たとえ天寿を全うしても、大きな悲しみであるのに、ある日突然、原因不明で父親を亡くしてしまったということが、どうしても受容できなかったわけです。でも、父親が「今、ここ」に存在しないということは真実なわけで、受容できない死を受容しなければならないという過程で、どうしても医療にかかわらざるをえない状況になったんですね。

それ以来、僕は医療事故に十年ほどかかわってきましたが、医療事故というのは、昔は闇の世界だったんですね。「こんなことが許されてもいいのか！」というような事案を山のようにみてきました。まあ、悪いものをみると良くしたくなるじゃないですか。

石田　医療事故被害者や被害者のご家族は、自分自身を納得させるプロセスが必要であり、そのプロセスの中で医療を改善していこうという動機づけが生まれるということですね。

伊藤　全ての人がそうであるとは思いませんが、僕の場合は僕自身のソウル（魂）の救済であったと思うんです。やはりネガティブな部分を見て、誰かを恨んだり、怒り続けることは負のエネルギーであるわけです。この負のエネルギーをプラスのエネルギーに変換することが、僕自身のソウルにとってもすごく良いことだったわけです。方法論として、「ここが間違っている、ここを改善しろ」というように、何かを責めなければならない。でも、これまでの一部の社会活動家や医療事故被害者にみられるように医療の全てを否定するような行動ではなく、上手い表現が見つかりませんが、ある意味責めることや改善を楽しめるような、もっと前向きでクリエイティブな方法論があってもいいのではないかという立場で、医療事故にかかわってきました。

石田　責めることと、楽しむこと？

伊藤　はい。でも責めることを楽しむのではなく、過ちから学んだことをより良い方向にしていくという、ある種の…医療における社会的なデザインの可能性のようなものを強く感じたんです。

伊藤隼也（いとう しゅんや）

写真家・医療ジャーナリスト
(株)医療情報研究所　法人代表
日本医学ジャーナリスト協会会員、東京都医療安全推進事業評価委員、日本医療機能評価機構広報委員、患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中。
ホームページ　http://shunya-ito.tv/

転載・二次使用禁止

石田　看護の場合はどちらかというと、周りの人たちが自分を認めてくれているという視点に立っているので、周りを変えて行こうというエネルギーがなかなか出しにくい人たちも多いと思うのですが。

伊藤　自分の置かれた環境をよりよくしたい、改善したいという気持ちは誰でも持っているのではないでしょうか。でも、多分看護師さんというのは疲れすぎているのではないかと思います。僕はこれまで数多くの医療現場をみてきましたが、現場の看護師さんから聞こえてくるものは「辛い、苦しい、大変」などという声が結構多いですね。この「辛い、苦しい」という感情を表出できずに抑圧し、自分が燃え尽きてしまっている人も多いのではないかと感じます。でも、仕事が楽しくて、患者さんもいきいきとしている病院も実は結構あるんですね。そういったところをテレビや雑誌で紹介したりしていますが、それでも全てが百点満点というわけではありません。

石田　どうしても看護の現場が明るいという話には行きにくいですよね。

伊藤　僕も仕事に埋没すると疲れますし、疲れてしまうとなかなかプラスのエネルギーが働きにくいですよね。でも、ものすごく巨大な、人として許せない間違いを変えたいという意識が強かったことと、同時にもともと写真家というのは野次馬根性の塊なので、色んなものをみてみたいというモチベーションがあったんですね。それで気づいたことは、ドクターや看護師さんは、自分の医療現場のことは知っているけれど、よそのことは、あまり知らないんじゃないかということです。もしかしたら、僕の立場はよそのことを紹介したり、何かを吸い上げたり、感じたりすることではないのかと思ったんです。とにかく医療現場にはたくさんの真実があるわけです。そんな真実をどれだけ伝えることができるかということが、僕の勝負であり、生命線であるわけです。

石田　伊藤さんご自身が生きているという実感、先ほど「魂」という言葉で表現をしておられましたが、伊藤さんの仕事ぶりをお聞きしていると、正に自己実現への道であったように感じました。

伊藤　自分という存在が社会の中でどう活かされているのかということは、「いったい僕には何ができるのだろうか」という自分への問いかけでもあり、僕にしかできないことを突き進むことが、僕にとっていちばん正しい生き方だと思うんです。それは看護師さんにとっても同じであり、「私にしかできない看護」というのがあってもいいのではないでしょうか。

石田　看護師のみなさんにも是非、そういった体験をしていただきたいです。そして、その体験こそが看護師として人間としての成長に繋がるのではないでしょうか。

▲

電球型のPATIENT SAFETY TOOL

シカゴ小児病院では、医療従事者向けの啓蒙活動の一環としてこのような、おもちゃで出来たツールで患者さんの安全を守る呼びかけをしています。

看護というのは、人間のリアリティを肌で感じ取れる仕事だと思います。

伊藤　たくさんの医療現場を歩いていると、現在看護師さんが不足しているとか、看護現場が大変だとか、医療機関の悲鳴しか聞こえてこない。それは日本の医療システムの根源的な問題であると思います。でも、全てがそうかというとそうでない現場もあるんですよね。そういった現場から学び取ることが重要であると思います。

石田　看護連盟のスタンスは「現場の声を聞かせてください」ということであり、これまで数千人の方から声をいただいています。多くは「人手が足りない、忙しい、辛い」といった意見です。でも一方で個人的にお話しをすると「私はこういう看護をした、看護師としても人間としても成長した、自信が持てた」といったお話しをされる方が、多いのも事実です。もしかすると、悪い方向にばかり目が向いていて、本当はいいことができる現場なのに、そこに視点がいかないような気がするのですが？

伊藤　やはり辛い現場でも、個人の満足度が高いステージにあれば、人間って頑張るものだと思います。看護という仕事は忙しい、辛いと葛藤する一方で、患者さんを通して、人間の痛い、苦しいといったリアリティを肌で感じることができる職業なのではないでしょうか。問題は、頑張れるから辛い現場を放置してもいいのかということであり、この問題を解決するには、個人の範疇を超えた政治的なエネルギーが必要であると思います。

石田　看護連盟の目的もそういった点にあるわけですが、頑張っておられる看護師さんは大勢いらして、頑張りながら苦しんでいる姿を見ることはとても辛いことです。やはり、環境を改善していくことが大切であると思います。

伊藤　そういった意味では、看護連盟というのは大きな力を持っているのではないかと思います。ただ、看護師さんというのは我慢するということに対して、閾値が高い人たちであるような気がします。看護というのは治療や手術のようにすぐには結果がでないので、評価されにくい一面も持っている。そういった意味では、なかなか個人の主張を訴えることができない環境にあるのではないかと思います。

ベッド・サイドから政治を変える！

石田　自分たちの体験を社会に訴えるということは、我々のテーマである「ベッド・サイドから政治を変える！」という大きな目標に繋がってくることだと思います。看護師1人ひとりの輝きや意志を伝えることができる団体を目指して今後も頑張ります。最後になりますが、是非これから伊藤さんには現場で直接、会員の方にお会いしていただき、対話を通して現場を少しでも改善できるようにお手伝いしていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

伊藤　お互いに出会の喜びと何かを感じ取ることができればと思っています。こちらこそ、よろしくお願いします。

シカゴ小児病院へ取材に行ったときに撮影した写真です。アメリカの病院は楽しい！療養環境とは何かをよく考えています。最近は日本の病院もがんばっているけど静かすぎますね。もっと生命に満ち溢れた楽しさがあってもいいと思います。（伊藤）
photo:shunya ito

インタビュアー
石田昌宏（いしだ まさひろ）

日本看護連盟幹事長、東京大学医学部保健学科卒、聖路加国際病院、東京武蔵野病院看護師、衆議院議員公設秘書を経て、1998年7月より日本看護協会政策企画室長。2002年7月より日本看護連盟常任幹事。2005年7月より現職

転載・二次使用禁止